

「牛にやさしく」

高橋 長 寿

(株式会社寿牧場 代表取締役)



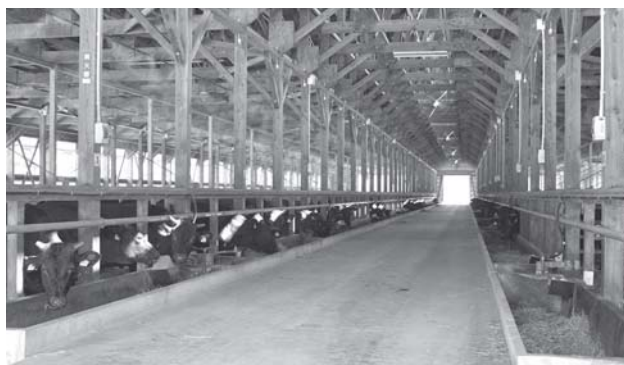
○事業の紹介

当社は、肉用牛の繁殖、肥育を行う牧場です。肉用牛の生産は一般的に、母牛に子牛を産ませて育てる「繁殖」と、繁殖農家が育てた子牛を購入し、飼料を与えて大きくして出荷する「肥育」の2つの工程に分かれます。

当社では現在、肥育をメインに繁殖も一部手掛けています。現在使用している牛舎は、国の「畜産クラスター事業」等を活用して2017年に完成し、黒毛和牛を3棟で合計600頭肥育しています。

牛舎というと、手作業が多く肉体労働、そして臭いが強いというイメージがあるかと思いますが、この牛舎では、自動給餌機を導入して省力化を進めるとともに、換気や温度管理にもこだわった、人にも牛にもやさしい環境になっています。

以前の牛舎では、120～130頭の牛を肥育し、手作業で飼料を与えていました。この規模でも



(木材を多用した牛舎内)

朝晩の1日2回、それぞれ2時間以上もかけて給餌していましたが、今の自動給餌機では、設定した時間に自動で稼働し、餌箱が空になれば補充作業も自動で行ってくれます。また、牛の成長段階によって餌の量や配合を変える必要がありますが、これもあらかじめパターンをセットしておけば自動で給与できます。ちなみに3棟600頭を管理する人員は4名です。もちろん従業員のお休みも必要ですので、交代で休暇を取ることも考慮したうえで問題のない人数です。



(自動給餌機「MAXフィーダー」)

○畜産との出会い

もともと私は現在の事業を始める前から畜産には関りを持っており、はじめは主に豚など家畜の人工授精師をしていました。その後、縁があって当時の秋田県畜連にサラリーマンとして勤務していました。勤務当初は動物薬品の担当者として、畜産農家を回っていたのですが、農家に行くと、ああだこうだと説明・指導しても、

いまいち反応が良くありませんでした。それは、農家の方々からすれば「実際に畜産をやっていない人間に何がわかるのか」という思いがあったからです。そこで畜産農家の目線を持つことが必要と考え、自分でも実際にやってみようという思いが強くなっていきました。

当時の上司に相談したところ、「環境がゆるす限りで始めてみたらどうか」と背中を押してくれたため、42歳でいわゆる脱サラをして本格的に肥育の道に入ることになりました。

我が家では祖父の代から牛を飼っており、小さい頃は草刈りをして牛に食べさせることが私の日課でした。牛は身近な存在でしたからすぐに肥育の面白さにも惹かれていき、成績もそれなりに上げることが出来ていました。

○「牛にやさしく」

ご存じの方も多いかと思いますが、肉質の格付けは1～5ランクに分かれ、4や5が上物と言われます。当牧場の上物率は、今でこそ約98%となっていますが、ここにたどり着くまでには試行錯誤の連続でした。

肥育において、「サシ」の入った霜降り肉を作るためにはビタミンAのコントロールが必要になります。意図的にビタミンAの摂取量を減らし、欠乏させることで肉質がよくなるのです。

かなり前の話ですが、あるとき牛舎の中にいる牛たちが何だかおかしいことに気付きました。一部の牛たちが房内を動くときに、隣の牛とぶつかって歩いているのです。そして夜には牛の目が緑色に不気味に輝いていたのでした。牛の失明です。ビタミンA欠乏が長く続くと光の情報視神経に伝える物質が機能しなくなり、重度になると瞳孔が開き、失明してしまうことが

あるのです。

そのようなことがあり、周囲からも「何をやっているんだ」と様々なことを言われ、自分自身も精神的に追い込まれ、まさにうつ病のような状態になってしまいました。ですが、皮肉なことに肉質はどんどん良くなっていきました。外見上は目の見えない盲目の牛なのですが、肉質は抜群、でもそれはやはり失敗だと今では思っています。いくら人間側の都合としての結果が良くなっても、生き物を扱う以上は失敗なのです。ビタミンの欠乏は牛にとっては決して良いものではありません。増体（体を大きくすること）にもよくありません。健康体であって、さらに肉質も成熟させなければなりません。そのために必要な栄養素を私は「ビタミンI（愛）」と呼んでいます。

現在の牛舎になり、県内外から多くの見学者が訪れるようになりました。牛を育てるコツの話になり、よく「どんな餌を使っているの?」と聞かれます。もちろん餌は非常に重要です。当社でも稲わらなど、こだわった飼料を使っています。ですが私は空気や水、牛を育てる環境がより大事だと感じています。夏場の牛舎は外気温よりも5度ほど低く設定しています。そして育てる人の接し方や表情も大事なのです。

考えてみると、肥育というのは牛を牛舎に入れて飼料を与え、大きく育てるものです。置かれている環境が大事なのはもちろん、牛たちが目にするのは基本的に育てる我々だけです。そして牛はそれをよく感じ取ります。牛は扱う人によって大きく変わります。餌を食べさせれば大きくなるというだけではありません。扱う人に元気がなければ牛まで元気をなくします。殺気立ってイライラすれば牛にも伝わります。牛

たちをよく見て、声をかけてやさしく接する、これが何よりも大事な「ビタミンI（愛）」だと考えています。

○今後の展開・目標

「今後の目標は？」と問われ、「現在600頭の肥育牛を2,000頭に増やすこと」と答えたこともあります。もちろん様々な条件が整えば規模の拡大は続けていきたいと考えております。ですが今はそれ以上に畜産を通じた地域への貢献が大きな目標になっています。

牛は草食動物ですから、もちろん餌として草を食べます。その草（牧草）を自給するため、休耕田を活用することが出来ると思います。また、牛舎から出る良質なたい肥を使って農作物を育てることも出来ます。そういった地域一体となった耕畜連携による循環型農業に取り組んでいきたいと考えています。

また、繁殖部門についても様々な取組みを行っていききたいと考えています。放牧には「夏山冬里方式」という仕組みがあります。文字通り、牛を夏に自然豊かな「山」で放牧し、冬は「里」に戻して育てるものです。この方法の最大の利点は、労力がかからないことです。実は昔はこの方法が通用しませんでした。その理由は寄生

虫です。自然の山に放つということは、寄生虫が着くというリスクがあります。しかし、今は動物薬品が進化し、内部・外部の寄生虫を回避できるようになりました。

牧場という一見昔ながらの商売ですが、ただ昔のやり方を踏襲するだけでは時代に乗り遅れてしまいます。常に進歩している新しい技術や考えを取り入れていかなければいけません。そのためには常にアンテナを張って、情報を入れ続けることが必要だと考えています。

日本の黒毛和牛は海外でも高く評価されています。現在のコロナ禍により輸出が激減しており大変厳しい状況ですが、いつか回復する時がくると思います。その時に向け、また秋田の畜産、農業の発展に少しでも役に立てるよう、研究を重ね、良い牛を育てていきたいと思っています。



(牛舎外観)

会 社 概 要

1 名 称	株式会社寿牧場	8 従業員数	4名 (2020年9月末現在)
2 代 表 者	代表取締役 高橋 長寿	9 年 商	約4億円
3 所 在 地	〒010-1406 秋田市上北手猿田寺村78	10 事 業 内 容	肉用牛の繁殖、肥育一貫経営
4 TEL・FAX	018-839-0295	11 設 備	秋田市河辺松渕字餅田沢 牛舎3棟 (7,081㎡) 堆肥舎 (1,167㎡) 飼料庫等 (293㎡)
5 創 業	1993年 (平成5年) 3月	12 経 営 理 念	「牛にやさしく」
6 設 立	2015年 (平成27年) 3月		
7 資 本 金	1百万円		